

## 平成27年度群馬県立自然史博物館活動の評価について

群馬県立自然史博物館専門委員 中村 修美

平成27年度の自然史博物館の評価結果並びに項目別実施結果をみると、博物館活動の各分野にわたり、多様な活動を行っている。外部からは理解されにくいところもあるが、博物館では実際に多様で多量の業務をこなしている。今回の結果からは、限られた職員で多くの成果を上げていると評価できる。現状の結果に満足することなく、業務の見直しをしながら博物館活動を進めていただきたい。

また、博物館として多様な活動をしていても、社会から博物館活動が十分に理解されていないことがある。特に、自然史系の博物館は数も少なく、社会に対しての博物館からの働きかけが弱かった面もあるのではないかと思う。日本を代表する自然史系博物館として、社会への博物館の理解を進めるためにも、多様な情報の公開・発信を進めていただきたい。

平成27年度の実施内容ではないが、開館20周年を記念して、これまでの歩みを総括し公表している。これは、これまでの活動を評価するうえで重要なことである。それにもまして、これからの10年を見据えたビジョンを制定しているのは素晴らしい。「これからの10年」にまとめられている方針や事業展開をぜひ実現できるよう活動していただきたい。

具体的な項目・内容でいくつかコメントさせていただく。

### 1) 観覧者数と近隣施設との連携

社会環境が変化しや施設や機会が多様化し、博物館の多くは入館者を維持するのが大変な状況である。その中で、観覧者数が増加していることは素晴らしい。また、近接して世界遺産の富岡製紙場や観光ポイントとなる施設がある。観覧者数に対して館独自の活動は必要だが、近隣施設と連携して来館者を迎えることも考慮する必要がある。

### 2) 対面アンケートの実施

来館者への対面のアンケートを実施しているのが良く、アンケートの結果から高いリピーター率を示しており、日常活動の中での博物館の高い位置づけを見ることができる。据置型のアンケートでは、回答者に偏りのある傾向がある。対面によることで、広い世代を対象にすることもできるし、より具体的な要望や意見、感想を得ることができる。対面でのアンケートは大変な労力を必要とするが、今後も継続していただき、博物館への要望を的確に把握し、対応の資料として様々な意見や情報を蓄積していただきたい。

### 3) 外国人来館者等への対応

2015年度には2000万人の訪日者があった。また、2020年にはオリンピック・パラリンピックが開かれ、今後も海外からの来訪者は増加する傾向だと考えられる。海外では、その地域の歴史や自然を知るために、最初に博物館を訪問するのがごく当たり前のことになっている。今後、外国人の来館者も増加すると考えられ、多言語等への対応が必要になってこよう。しかしながら、展示スペースには限度があり、出せる情報も限られる。また、

費用的な問題もあり、紙ベースでの資料も簡単ではないことも考えられる。そこで、すでに設置されている Wifi を利用すれば、より具体的な情報を提供することもできるだろう。これは、外国人対応だけでなく、ユニバーサルデザインの観点からも、大勢の人に有効な一つの方法である。今後の活用を検討いただきたい。